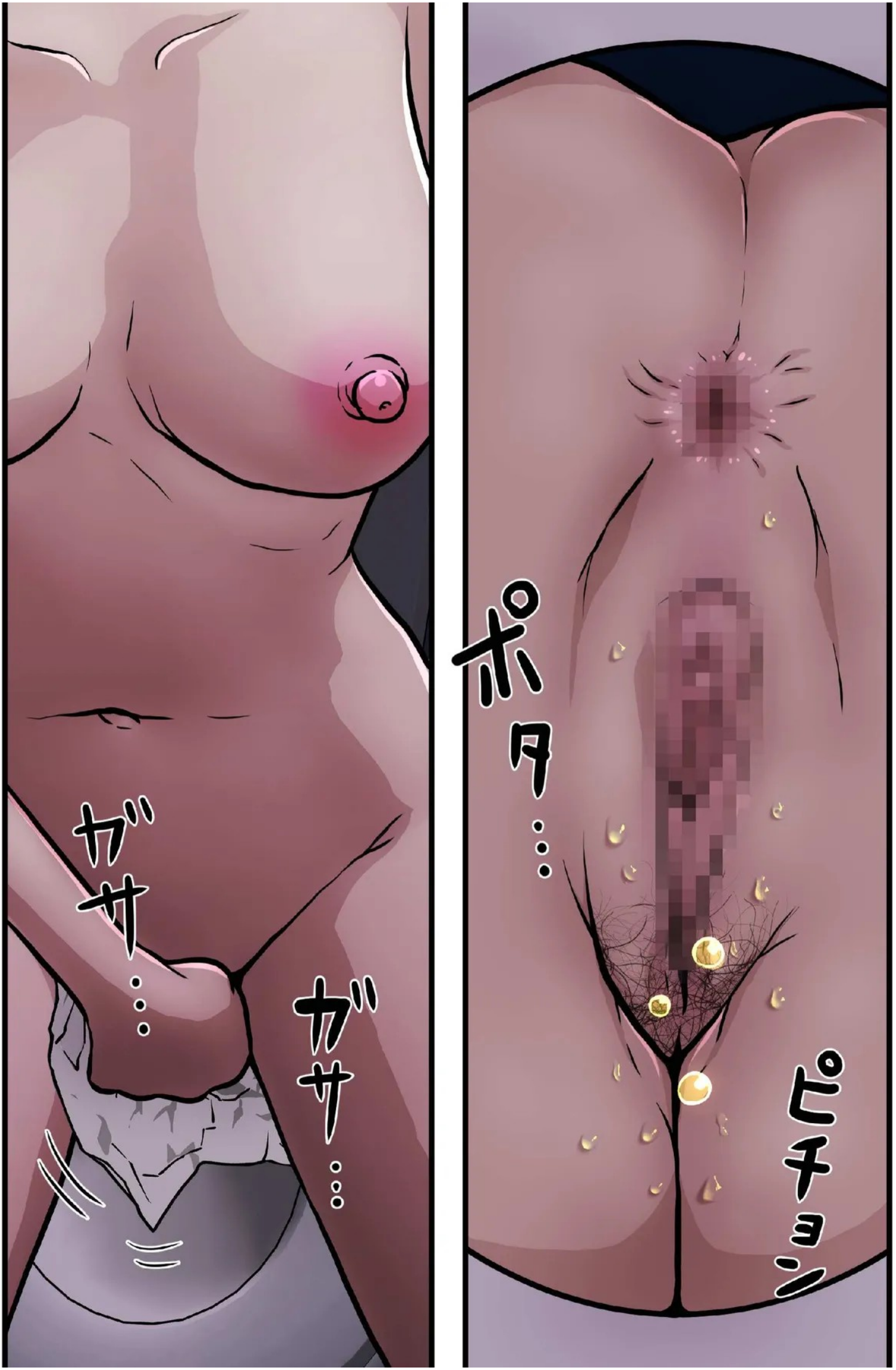
女になってしまった
せいで、本来歩む筈だった
人生から大きく
外れてしまった奴ら。
佐竹 五郎
R18
ADULT ONLY
成人向け作品につき
18歳未満閲覧禁止
転載禁止
Reprint is prohibited.
無断転載・製版・複写・
Web上へのアップロード禁止

マサト、そんな所にホクロあるんだ(笑)
……
…マサト？
…なあ…俺らさ…

十年後―
卒業したら…
一緒に
暮らさないか？
チョロロロ…
ショボ…


ポタ…
ピチョン
ガサ…
ガサ…

結婚を約束してたけど
女になってしまったせいで
別れてしまった元カノと
久々に会う奴。

あ……
終わってる…

10年前、
私は女になった。

原因は分からない。

遅くはならないの…？

うん、夕飯には帰る。

大学は辞めた。
女として就職し、職場の男性と結婚した。

十年も女をやっていると、
自分が女であることが
当たり前になってしまった。
服装、化粧、生理現象。
そして――気づけば、他の女性を
「そういう目」で見ることも
なくなっていた。
――でも、今日だけは。

年に一度、香織と
会う日だけは、
「俺」は「男だったんだ」と
意識する。

電車の揺れが、ふとももの
内側にじっとりと熱を運ぶ
たび、妙な錯覚に
囚われる。

彼女の口元、目線、肌の匂い
――それらを思い出す度に、
スカートの奥で、ペニスを
押し殺して座っている
ような気がしてくる。

彼女を鮮明に思うと
同時に、昔、無意識にしていた
あの座り方をしてしまう。

さっきまで
脚をきゅっと閉じていた
はずなのに、いつの間にか、
ごく自然に「そこ」にゆとりを
作って座っている。

「種」を残す本能みたいなものだろうか。しかし私と彼女ではもう……

マサト。

しかし、「俺」と彼女ではもう……種を残すことは出来ない。命を後世に繋いで行くことは出来ない。今、「俺」はどうしようもなく「女」なのだ。

香織はどう見るだろう。
久しぶりに会う「俺」を、女友達として受け入れるのか。
それとも――一瞬でも、
「恋人だった人間」として、
目を細めてくれるだろうか。
たとえ幻でも――
香織の前に立つその瞬間だけは、
「俺」の中で、確かに「男」の自分を意識している。

十年前、香織と並んで歩いた時、
「俺」は自分のことを、「男」だと疑う余地なんて無かった。
だけど今、「俺」はどう振舞ったらいいか
分からなくなっている。
男らしく見せようとするのも、どこか滑稽だ。
かといって、女みたいに膝を揃えて座る
ところを見られるのも、ひどく嫌だった。
そう思い、ラフに座れる個室の料亭を予約した。

気を許しているのか、はたまたもう「俺」は男として警戒する価値がないと見なしているのか……

ふと脚を崩す彼女のスカートの中の影に目が吸い寄せられた。

こんな些細なことがきっかけで、とうに無いはずの「本能」が、まるでバグみたいに、ふと目を覚ました。

この身体には、そんな機能も、意味も、無いというのに…

今、「私」は女物のショーツを
穿いている。
繊細な布地が、何も無い
股間にぴたりと張りついて、
「それ」の存在を静かに否定する。
その上をストッキングの
通気性の悪い素材が熱を逃がさず
こもらせるせいで、
内腿に、ぬるい汗がじっとり滲む。
どうみても「女」の装いの中で、
「俺」の脳だけが、かつての
「そそり立つもの」を
感じている。
むん…
むん…

体の深部――骨盤の奥の方から、
じわじわと熱が這い上がってくる。
それはまるで、
まだ睾丸で精子が作られていて、
今にも放たれそうな気配。
実際にはもう「出す」ことは
できない。
その機能は、
別の「機能」「役割」を
背負う事になった。
けれど、「俺」の心だけが、まだ
「男としてのセックス」を
覚えている。
反応が起きて、熱が集まり、
最後の段階まで駆け上がる。
その先に、出口はもうないのに。

ぴゅる…
びゅるる…？

どく…
どく…？

彼女と別れ、
自宅に着いた私はすでに、
「女」の顔をしていた。
いや、駅の改札を抜けて、
彼女の背中が人混みに
紛れた瞬間から
私は、もう女だった。

スカートの裾を
押さえる仕草。
歩幅を小さくする癖。
小さなバッグを
両手で抱える手元。
全てが彼女と会う前に
戻った。

ただいま。

当たり前だ。
この身体は女で、
着ているのは女の服で、
その服に合わせた
振る舞いを、
十年続けてきたのだから。

なあ、マサミ…

ん～？

もう、あの女と会うなよ…

……!!

お前は俺の妻だろ…？「男の自分」なんて捨てろ…

だって…
…でも…

夫は今、私の体内に遺伝子を刻みつけようとしている。
それはかつて私が男だった頃、何度も湧き上がった、精子を送り込む衝動。
自分の種を拡散したいという本能だ。

か…

とん…♡

香織…

そして今の私は……
自分の身体の中に優秀な遺伝子を仕込む…
強く優秀な男を、欲するだけの生き物。
かつて、自分がペニスを持っていた頃はそんなこと思ってもみなかった。

ずにゅうう♡

香織

もう全部女になれ。
頭の中も全部。
二度と過去の名前で
思考するな。
うん…♡
うん…♡
誰もが、自分の意思で
選んでいるつもりでいる。
誰を好きになるか。
どんなふうに生きるか。
でも本当は、もっと冷たくて
規律めいた「何か」に
選ばされているだけなのだ。

男として生まれたのに
突然女にされて、
そのまま十年……ただ
生きるしかなかった。
そんな経験をした
私は、それを痛いほど
理解している。
おしまい

お～、キヨシ！久し振りだなぁ
う…うん…
そっか…今もまだ女なんだな…
……
美少女になるとかじゃなくてただただ性別が女になっただけの奴。
同窓会なんて行ったせいで、昔の嫌なことを思い出してしまった。

キヨシ!!うわ…きったな…

んだよ…

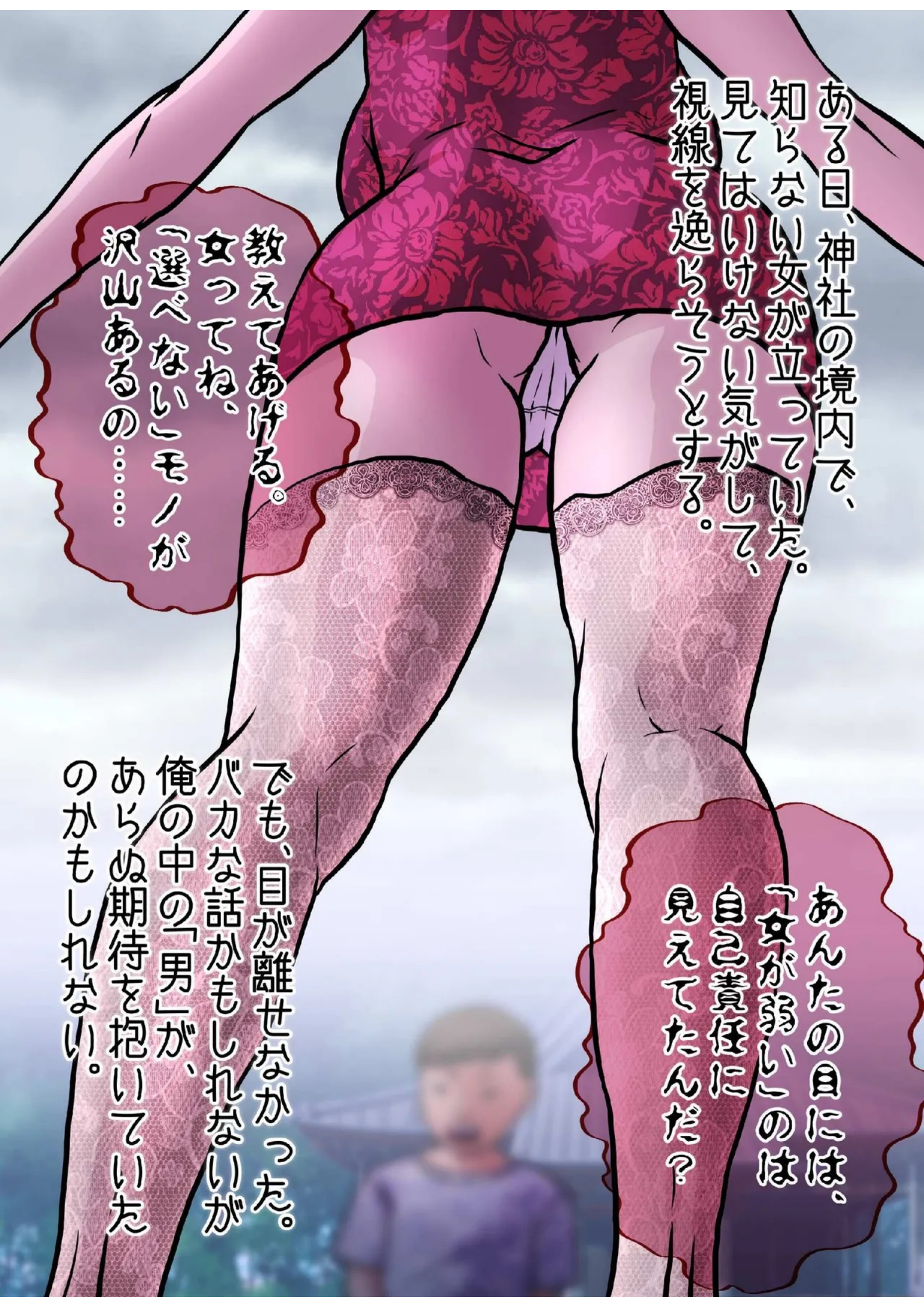
あんた…彩香ちゃんの顔にあんな事…傷残ったらどうすんの…無抵抗の女の子だよ!?

男と女の違いなんて、立って小便できるかどうかぐらいだろ…？こんなふうによォ。弱ぇザコなのは自己責任だろ。

ポリポリ

ジョボボボ…

かつて俺は男だった――全てが変わってしまったあの運命の日までは。


ある日、神社の境内で、
知らない女が立っていた。
見てはいけない気がして、
視線を逸らそうとする。
教えてあげる。
女ってね、
「選べない」モノが
沢山あるの……
あんたの目には、
「女が弱い」のは
自己責任に
見えてたんだ？
でも、目が離せなかった。
バカな話かもしれないが
俺の中の「男」が、
あらぬ期待を抱いていた
のかもしれない。

選べないって、どういう感覚か分かるように、あなたの「形」を、変えてあげる。

そう言うと女は俺の大切な所に手を――

ぐちゅ…

ぬちゅ…

抵抗するつもりなら出来たかもしれない。逃げられたかもしれない。でも、何も出来なかった。

はう…

ぐりゃッ

ぐりゃッ

ぐりゃッ

女の手はひんやりしていて、でも優しくて、気持ちよくて、これを逃したらこの感覚は一生体験出来ない……そんな気がしたのだ。

ひ…ッ

その予想通り俺は――

「選べない」「女」の人生を全部、生きて。違いなんてないんでしょ？

「あの感覚」を「一生」体験出来なくなる。

愛おしいものを触るように、女は、「俺のもの」を撫でた。

人に、ましてや女性にこんな事をされるのは初めてだった。

次の瞬間……

「やっと見つけた」と

でも言いたげに。

なにかを――

「内側から

ひっくり

返された」。

俺の中で

心の拠り所に

している

「何か」を……

永遠に

「没収」される

そんな感覚……

にちイッ…

その日、俺は
生涯後悔しても
しきれない
代償を背負う
事になった。

皆が駆け付けたとき、
俺は一人で立っていた
という。
不審な女なんておらず、
この境内も誰一人
出入りは無かったらしい。

——出血があっても驚かないでください。それが正常です。
子宮の状態も正常です。妊孕性(にんようせい)も問題無いでしょう。将来的には、自然妊娠も——
俺は絶対子供産んだりしねえよ!!男と結婚もしねえ!!
こら…!!キョシ…!!
結局、俺の身体が元に戻ることは無かった。俺には新しい戸籍が与えられ、俺は女として生きることになった。

みんなでゲームしようぜ～!!

お～い!!飯持って来てくれ～

田舎では定期的に宴会があった。

さて、皆の食事の準備しましょ。キヨミちゃんも手伝ってね。

ぐず…お…俺もみんなと遊びたい……

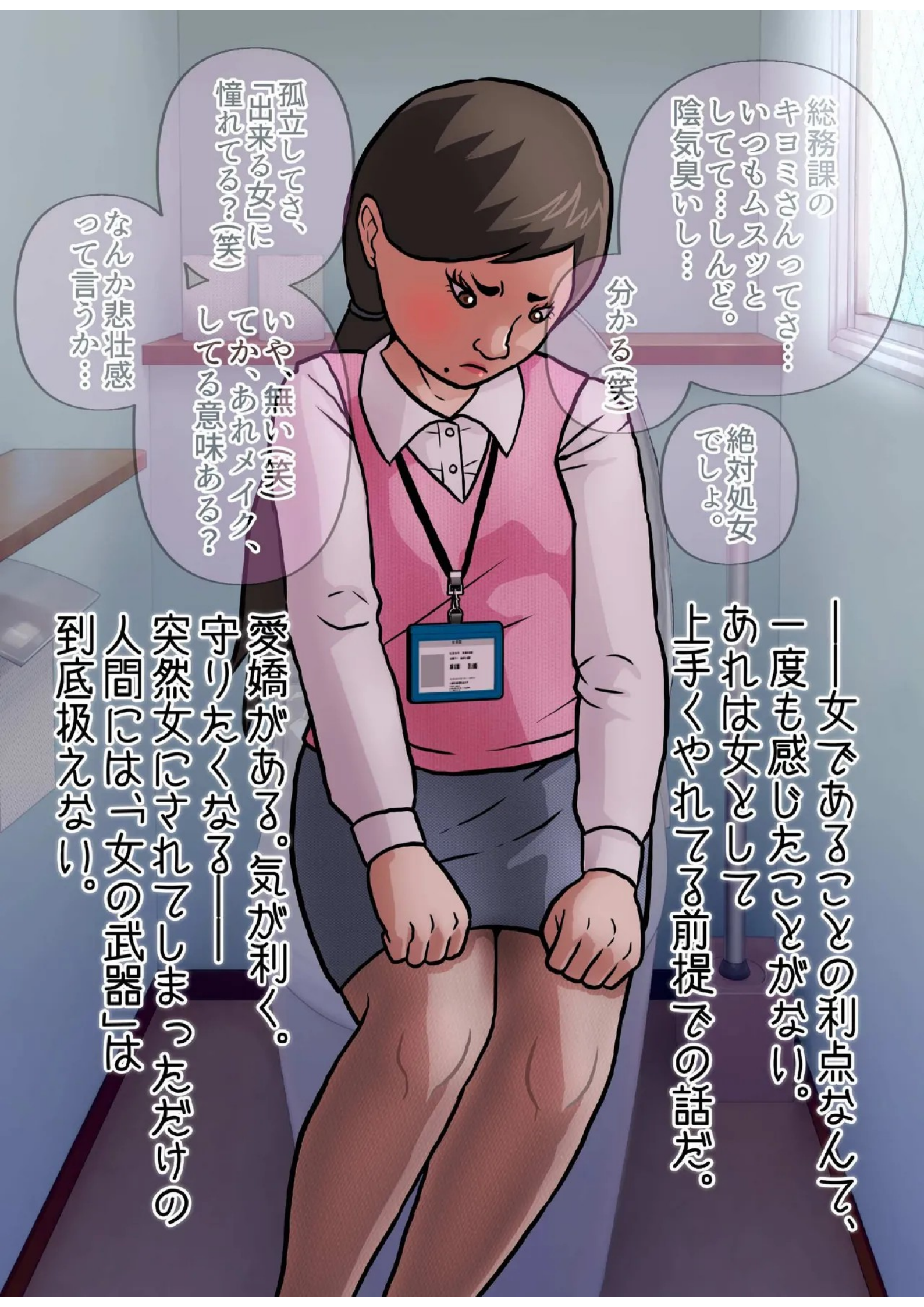
男たちは笑って座っている。女たちは立って気を回している。その構図の、明らかに「女側」に自分は立たされていた。男は観客で、女は演者。そう位置付けられているとすら感じた。

女の子なんだから気配りできた方が良いわよお？

後ろから、かつて一緒に馬鹿をやった
友達の声が聞こえる。
細かい事なんて気にならなかったあの頃。
数年前まで、俺もその輪の中にいたのに、
……でも今は――男だった頃より
世界が狭くなった気がする。
女の自分には夜の道は、
深く暗く感じる。
背後から遠ざかる笑い声が、
やけにまぶしく聞こえた。
明日休み
だしさぁ、
カラオケで
オールしね？

女になってから、男女にはいくつもの壁があることを知った。

夜道を一人で歩けない。
階段の下に立たれると、背筋が
声を荒げれば、「ヒステリ
笑い方や仕草に
「女のくせに」
ブラのワイヤ
生理が来るた
下腹部が痛みで
走れば胸が揺れる
冷えやすく、むくみやすい。
「女一人で？」という言葉が
トイレに行くだけでも時間
肌が弱く荷物を持てば、肩
「女らしさ」のフィルタ


総務課のキヨミさんってさ…いつもムスッとしてて…しんど。陰気臭いし…
分かる(笑)
絶対処女でしょ。
孤立してさ、「出来る女」に憧れてる?(笑)
いや、無い(笑)てか、あれメイク、してる意味ある?
なんか悲壮感って言うか…
――女であることの利点なんて、一度も感じたことがない。あれは女として上手くやれてる前提での話だ。
愛嬌がある。気が利く。守りたくなる――突然女にされてしまっただけの人間には、「女の武器」は到底扱えない。

ハァ…
ハァ…
ハァ…
ハァ…
同窓会なんて
行ったせいで、
嫌なことを
思い出してしまった。

ハア…ハア…
…無い…
……無いい…
俺のちんちんがどこにも無いよお……
せっかく男の子として生まれてきたのにい…
嫌なことを思い出したときはいっそのこと思いっきり向かい合えばいい。

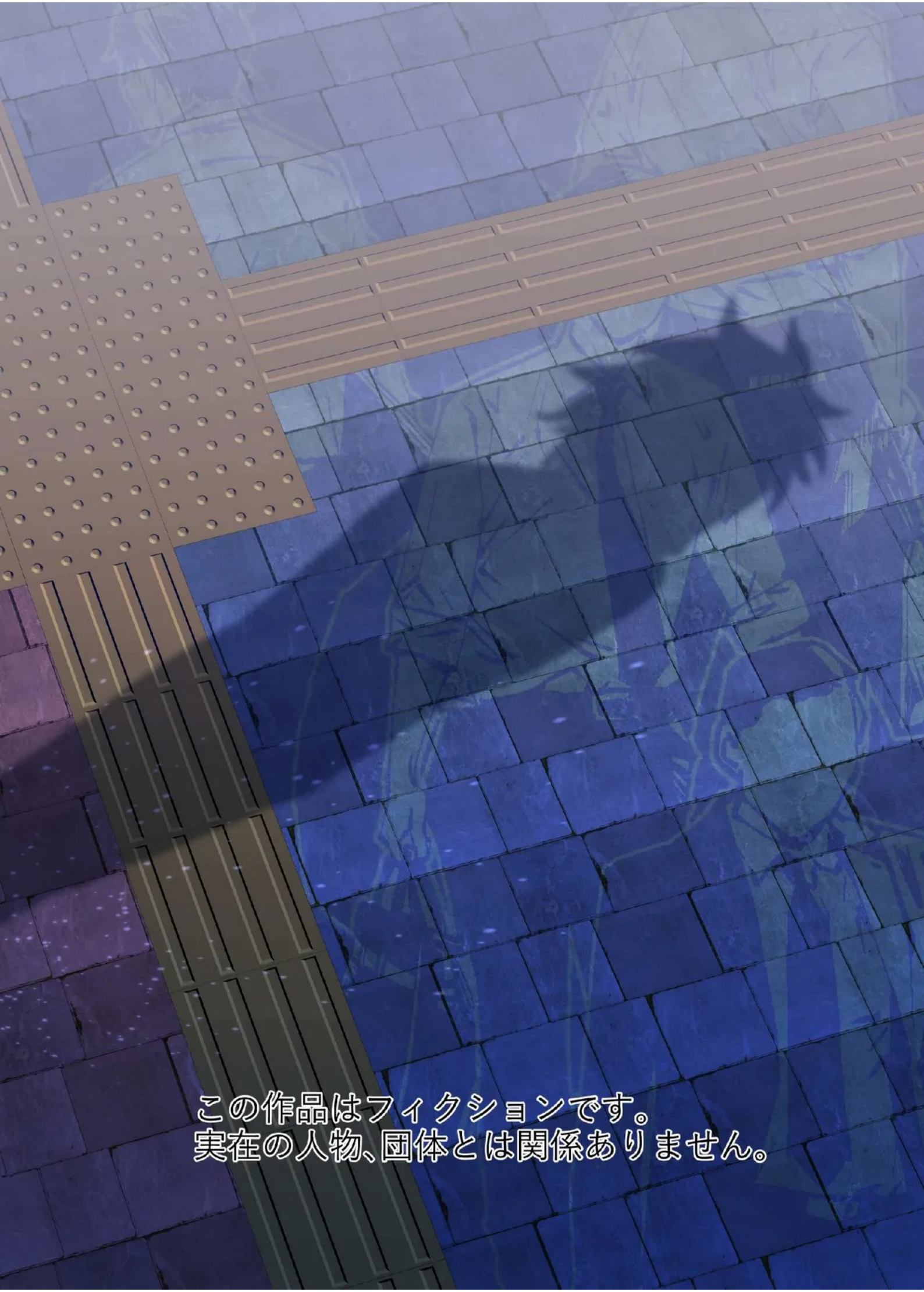
返して…!!
返してよォ…
俺の
ちんちん
返してぇ…!!
男の子に
戻してぇ…
人生が始まった
あの日。
今でも ハッキリ
覚えている……
ペニスが
無くなっていく
あの感覚。

人生で最も絶望し、
人生で最も気持ちよかった
あの日と向き合えばいい。
おしまい

女になってしまった
せいで、本来歩む筈だった
人生から大きく
外れてしまった奴ら。

女になってしまったせいで、本来歩む筈だった人生から大きく外れてしまった奴ら。

発行日　：2025年04月23日
著者　　：佐竹 五郎
サークル名：佐竹五郎記念館
連絡先　：satake@doshigatai.com


この作品はフィクションです。
実在の人物、団体とは関係ありません。